

砂場遊びと領域「人間関係」  
—幼稚園における事例研究—

山崎 幹子<sup>1)</sup> 圓入 智仁<sup>2)</sup>

Playing in a Sandpit and the Child's Development Area : "Human relationships"  
—Case Study in Kindergarten—

Mikiko Yamasaki

Tomohito Ennyu

## 1. 問題と目的

多くの幼稚園や保育所、認定こども園には砂場がある。砂場遊びが子ども達に必要であると、各園で認識しているからであろう。他方、砂場では子ども同士のおもちゃの取り合いなど多少のトラブルは発生するが、大きな事故や子どもの安全を脅かす場所として保育者が認識することはほとんどない。保育者は砂場に対する関心が薄いか、子どもが砂場で楽しそうに遊んでいれば安心できると感じているようである。

砂場や砂遊びに関する多くの先行研究がある。「砂場はどんな遊具よりも優れていると思う。」(仙田、1992)、「砂遊びが子どもにとってどのような意味をもつ遊びであるかを明らかにすることは、遊び環境について真剣に考え、それを守る上でも重要な課題となる。」(笠間、2014)などの指摘から、研究者や保育者が砂場遊びが子どもにとって重要であると考えていることに異論はないだろう。「幼児の砂遊びに関する日本の研究動向と今後の展望」(朴・中坪 2008)によると、1980年～2007年までの約27年間で、57本の砂(場)遊びに関する研究論文がある。さらに、その後は同様の研究が2008年～2019年までの約11年間で37本あり、近年、砂(場)遊び研究の数が増えていることを確認できる。これらの研究成果から、研究者が砂場での遊びを、子どもの成長に多くの影響をもたらす可能性を秘めている重要な遊び環境の1つであると捉えていることが分かる。

本研究では、幼稚園教育要領の領域「人間関係」の「内容」が砂場遊びを通してどれだけ達成できるのか、事例を通して検討することを目的とする。

幼稚園教育要領には、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域が設定されており、保育を行う上でその5領域全てが達成できるように、それぞれの園独自のカリキュラムがあり、そのカリキュラムに沿って日々の保育計画がなされている。

子どもは成長する過程で親や保育者、友達と関わり、他者と一緒に遊ぶことの楽しさ、人との関わり方を学んでいる。砂場遊びにおいても同様であり、「人」と言葉を交わし「人」の様子を観察することで、遊びが始まったり、展開したりしている。あるいは子ども自身が、周囲の人に見守られているという安心感を持つことで、周りとの信頼関係を築きさらには、自信や自立心を養うことになる。以上のように考え、5つの領域の中から「人間関係」を選択した。事例の中にも、友達同士の関わりが生まれたことにより、砂場遊びの発展が見られる内容が多く見られる。そのことにより、砂場遊びが子どもの成長に欠かせない重要な遊びであることを明らかにする。このことは保育実践の場で、保育者が子ども達の砂場遊びの有効性や意味を意識する発端になると考える。

平成30年度の幼稚園教育要領の改訂に先立つ平成28年12月の中央教育審議会答申では、新しい時代に求められる資質・能力が、子ども達の育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが示された。これを踏まえた学習指導要領等では「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたって、その枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善や充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。その6点とは、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資

質・能力)、②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)、③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)、④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)、⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)、⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)である。これらを、砂場に注目して考えると、「①砂場遊びで何ができるようになるか」、「②砂場遊びの中で何を学ぶか」、「③砂場遊びでどのように学ぶか」、「④砂場遊びで子供一人一人の発達をどのように支援するか」、「⑤砂場遊びで何が身に付いたか」、「⑥砂場遊びを実施するために何が必要か」と換言することができる。

幼稚園教育要領の各領域に示されている「ねらい」は、幼稚園教育において育みたい資質や能力を、子どもの日々の生活する姿から捉えたものである。また、「内容」は「ねらい」を達成するために指導する事項である。本研究では領域「人間関係」のねらいに即した「内容」について、砂場遊びの事例を基にして、どのような部分が子どもの成長に関係しているのか、あるいは子どもがどのようなことを経験して、何を考え、充実感や満足感を味わっているのかを検討する。

## 2. 方法

N大学付属I幼稚園の園庭に全学年共有の遊び場として設置されている砂場を対象とし、そこで遊ぶ子どもの様子を以下の通り観察した。令和2年7月から10月までの39日間、朝の好きな遊びの時間(およそ9時30分～11時)の砂場遊びの様子をビデオカメラ2台(定点と撮影者手持ち)で記録した。観察の際、撮影者本人が前年まで未就園児クラスの担任をしていたため(観察時は休職中)、子ども達からは身近な保育者として見られてしまい、砂場遊びの観察中でも「せんせい」と声をかけられ関わりを求められることがあった。そのため、撮影者は極力第三者の立場で子どもの様子を撮影するようにした。また、撮影中は子どもが砂場遊びをする際に妨げにならない場所に立ち、遊びに没頭できるように配慮した。

本研究では、問題と目的で述べたように、幼稚園教育要領の領域「人間関係」の「内容」に着目する。その分析方法として、観察したものの中でも7月分の子どもの言動を記録に書き起こした。それらを踏まえて、本研究では砂場遊び事例から幼稚園教育要領の領域「人間関係」のねらいに即した「内容」に着目する。

事例の分析については、次の先行研究を参考にしてい

る。「幼児同士の砂遊びの特徴—カーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—」(箕輪 2006)と「砂場におけるままごと遊びの発達の検討」(箕輪 2010)である。前者は2003年4月から6月までの3か月間のうち約15日間、東京都内にある私立A幼稚園の砂場を観察している。その園の自由遊び時間に3歳から5歳までの子どもの砂場での様子を参与観察し、メモなどに記録している。後者は2005年4月から7月の4ヶ月間のうちの10日間、同じ私立A幼稚園内で各学年に設置されている砂場の様子をビデオで撮影し、記録に書き起こしている。

前者の分析と考察では子どもが遊んでいる場面をテーマごとに分け、19事例を取り上げて1つのテーマについて遊びを展開する際のやり取りに含まれるカーヴェイの4つの概念「プラン:動きや話の筋書きを決める動作系列のレパートリーで、日常生活の経験に基づく」、「役割:日常生活において出会った人の一般的な動きをもとに、自分とは異なる人物を演じること」、「物(の見立て):プランや役割に沿って、モノを別のモノに見立てて扱うこと」、「状況設定:実際の状況とは異なる架空の状況を作りだすこと」に該当する内容を抽出している。その内容と、ごっこ遊びの先行研究で提示された内容との相違について検討している。その結果として箕輪は上記の4つの概念を用いつつ、子ども同士のやり取りを砂の状態や砂に関わる他児の動きから読み取ることができるとする。また、砂場が遊びの拠点として機能し、砂遊びに参加する子ども達が砂の状態変化という偶発の出来事に出会い、その変化への対処を共に行うと考察している。

後者では記録に書き起こした内容からままごと遊びをする様子が含まれる場面を年齢ごとに選択し、その場面から箕輪が各年齢について特徴を導き出し、最も典型的に見られた場面を事例としている。その事例の内容について上記のカーヴェイの4つの概念を援用して分析し、それぞれの年齢ごとの砂場におけるままごと遊びの特徴を、環境との関わりと人との関わりから考察している。その考察として、砂場でのままごと遊びでは年齢が上がるにつれて子どもの持つイメージがより具体的になり、子どもの動きや遊びの展開が砂の性質に添って行われる段階へと変化することを明らかにしている。

本研究では観察の方法や記録の取り方、また、記録の記述の仕方について箕輪の研究を参考にしている。他方、本研究における分析の観点は遊びそのものや、幼稚園教育要領に依拠する点で上記の箕輪の各論とは異なっている。さらに、同一園の1か所の砂場に注目していること、そこにおける異学年のやり取りなども含めていること、そして保育実践の経験を持つ立場で子どもの実態などを掘り下げて検討していることが、先行研究にはない。本研究

のオリジナルな点であると考える。

### 3. 事例検討と考察

領域「人間関係」の「内容」は以下の通り13ある。

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達によさに気付き、一緒に行動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切に、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

これらの「内容」は、以下で検討する I 幼稚園の9の事例のそれぞれに当てはめることができる。事例と「内容」の対照を次の表1で示すこととする。

表1 事例と「内容」の対照表

事例番号	関連する内容の番号
事例1	(1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(7)、(10)
事例2	(1)、(2)、(6)、(7)
事例3	(3)、(8)、(12)
事例4	(4)、(5)、(7)、(8)、(12)
事例5	(4)、(6)、(7)、(10)、(12)
事例6	(5)
事例7	(9)、(11)
事例8	(9)、(11)
事例9	(5)、(6)、(7)、(8)、(10)

事例中にも適宜、カッコの数字を挿入し、内容の番号との対照ができるようにしている。

ここからは、I 幼稚園の砂場遊びの事例と領域「人間関係」の「内容」との関連を検討する。なお、地域の人々との関わりについて扱う「内容」(13)はそもそも砂場遊びとは関連がないと考えるため、検討の対象とはしない。また、事例文中の破線は、時間の隔たりがあることを示している。

#### 3-1. 山作り

##### 事例1 「山作り」

〈7月8日(水)曇りのち晴れ(大雨後)〉

事例
<p>●F男が山をみて「だいぶとどいたんじゃない？」と高さを確認する。○K子は足で山を固める。そして、●F男が「<u>K子ちゃん、みずをかけたらほりやすいよ</u>」と言うと、○K子は「<u>おみずくんでくる</u>」と水を汲みに行く①。(1)(2)(3)(4)(6)(7)(10)</p> <p>●G男が取っ手付きのふるいで砂をかけ、●F男もスコップで砂をかけ「<u>ここまで(砂場の日除け一観察者注)、とどくくらいだつて</u>」と言う。</p> <p>○K子がバケツに水を入れてきて、溝に流す。●F男は「<u>ここ(山の頂上一観察者注)に</u>」と言ったが、<u>すぐに水がかけられた溝を掘り出す</u>②。(2)(3)(4)</p> <p>○K子がじょうろに水を入れて持って来て、山の頂上からかけていると、●F男が「<u>ぜんたいにかけてね</u>」と声をかける③。(1)(4)(6)(10)</p> <p>保育者が大きなバケツに水を入れてきたため、●F男はそのバケツからアイスクリームのコーン型のおもちゃを使って、水をすくい、山にかける。○K子は<u>担任にバケツからじょうろに水を入れてもらい、山にかける</u>。●G男もアイスクリームのコーン型のおもちゃで水をかけ始める④。(1)(2)</p> <p>保育者が●F男に、「かたまりそう？」と聞き、山を手で固めることを手伝う。○K子もじょうろで水をかける。</p> <p>●F男は砂をかけ「<u>もうすぐとどきそう</u>」と言う。お茶のみ休憩になる。</p> <p>○K子は<u>足で山の中腹をほって、貝殻を拾う</u>⑤。(2)(3)(4)</p> <p>片付けの時間になる。</p>

事例1は砂場の上に掛かっている日除けの高さまで山を作りたいという気持ちから始まった遊びであり「内容」の(1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(7)、(10)が関連している。その過程の①では、●F男が砂に水をかけると、山の周りの溝が掘りやすくなることについて同学年の子どもに声を掛け、伝達し合っていて遊びの展開に変化がある。友達と共に「山作り」を楽しみたいという気持ちが表れてい



る。あるいは友達との関わりの中で、自分で行動して遊ぶ楽しさを経験しているとも言える。②でも①同様に友達との関わりの中において自分で行動しながら、物事を楽しもうとしている。③ではじょうろの水のかけ方を伝え合うことで、遊びを共有している。その目的が同じ方向を向いており、遊びが発展している様子が伺える。④からは保育者や友達との関わりを通して、遊びを進展させている様子が伺える。⑤では裸足の感触をとて気に入った様子で、周りにもその気持ち良さをアピールしていたようである。

この「山作り」の事例は年長組の子ども達の遊びである。③では言葉でのやりとりや、保育者が水を砂場の近くに用意することで、山に水をかけて固める行動をスムーズに行っている。参加した子ども達が友達や保育者と一緒に、山を高く作りたいという同じ目的意識を持っていると理解できる。友達同士で「山作り」の役割分担をしたり教え合ったりすることで、山を高く作るには砂や水を加えると良いことを共有することができ、関わり合いを深めている。

### 3-2. ダム作り

#### 事例2 「ダム作り」

<7月15日(水)曇り>

事 例
◆A太が、水入れの容器に水を入れてくる。●E男は「A太くん、ここにながして」とダムの部分に水を入れるように指示する。◆A太と◆B太は水を入れる①。(1)(6)(7)
●E男が川の始点となる穴に、「こうしていれて」と言うと、●H男が「いいことおもいついた、こうしたらどう？」という。それに対して、●E男が「だめだよ」と否定し、周りの子ども達が皆、●E男にアイデアを伝えている②。(1)(2)(6)(7)
◆C太が設置していた、漏斗型のおもちゃに水を流すことでまとめ、●E男が「ここにみずをいれるから、ガッとここをほらないでね」と言い、水を汲みに行く③。(2)(6) 周りもみんな「うん、わかった」と同意する。

上記の事例2は異学年の子ども達が協力しながら、ダム作りを展開している遊びである。そこから「内容」の(1)、(2)、(6)、(7)が関連していることが分かる。①では同学年と異学年の子ども同士の関わりの中で、お互いに意見を出し合ったり協力したりして遊びを楽しみたいという共通の目的を持ち、その目的に向かって同じ気持ちで遊んでいる。1人1人の子どもが遊びたいことを自分で考え、その次につながる行動ができている。多人数で遊

ぶ際にはリーダーシップをとる子どもの存在も出てくるが、②では●E男の存在が大きく、周りの子ども達が●E男に遊びの同意を求めている。③の●E男は、普段は自分の考えを通そうとするところもあるが、ここでは他の子の意見も受け入れることで周りの友達からも頼られているようである。一方的な遊びの提案ばかりでなく友達の意見を取り入れたり、遊びのアイデアを受け取ったりすることでお互いに楽しく遊びを進めたいという共通の気持ちがあることが伺える。この遊びは「川作り」の発展であり、工夫したり協力したりして遊びの楽しさを味わいながら、共に過ごす喜びが表れている。

### 3-2. 穴掘り、川作り

#### 事例3 「穴作り」、「川作り」

<7月16日(木)曇りのち雨>

事 例
●A男が1人で穴を掘って水を入れ、その中の泥を手でかきだしている。バケツに水を汲んで持ってくる。砂場で◆M太を待っていた◆N太が穴を見て、「わあ、これいいねー」と言い、●A男が水を流している所を見ている①。(3) そして、◆N太は「ねえ、こういうやつ、つくらん」と水を持ってきた◆M太に提案し、「いっぱいみずいれよう。どんどん」と言い、「みんな、すこぶでいっぱいほろう」と言うと、◆C太が「おー」と言う②。(8)(12)
●A男はそれを聞いて「ふかーくほってね」と伝える。
●E男が「ぼくたちかわつくってるんだ」と言うと、●A男も「おれもかわつくってるんだよ、つなげない？」と言い、●E男も「いいねえ」と答え、「よし、じゃあ、つなげよう、ここ」と言い、●A男の穴のほうへ掘り進める。●A男も自分の穴の方からスコップ(小)で掘り進めながら、「おっきいんでしょ？」と聞くと、●E男が「おっきいよ」と言うと、●A男が「こっちはちっちゃいよ」と言って川を繋げる③。(3)(8)

上記の事例3では子ども同士で互いの遊びを認め合い、遊びが伝わったりつながったりしている。また、遊びに必要な水を運んで来ることなど、自分でできることは自分でしている様子が伺える。これらのことから「内容」の(3)、(8)、(12)が関連している。①では●A男が自分で掘った穴に水をたくさん入れて溜まった様子を◆N太が見て興味を持ち、自分達も同じように遊んでみたいと思ったようである。異学年で遊びを認め合い、興味が湧き、伝達し合って遊びが広がり展開している。②では友達同士で協力して遊ぶ楽しさを味わいながら、同じ道具を使い

共同作業になり連帯感を高めている。③では別々に「川作り」をしていた2人が川を掘る中で出会い、気付き、気持ちがつながり、川をつなげることになった遊びの様子である。それぞれが「川作り」に楽しさを感じていたこともあり、2人の川をつなげることで遊びが一層楽しくなると思ったのだろう。さらに年長組の子ども達同士だったため、意思の疎通もはっきり行うことができ、その中で自分のやりたいことを伝え合っていた。「川作り」を楽しむにはどのようにすれば良いか考え、自分で行動していると考えられる。

### 3-4. 落とし穴、穴掘り

#### 事例4 「落とし穴」、「穴掘り」

<7月16日(木)曇りのち雨>

事 例
◆M太と◆N太がスコップ(大)持って来て、◆N太がスコップを砂に指し、「くるくるしよう」と言うが、すぐに「あっ、おとしあなつくろう」と言うと、◆M太が近くにある穴を指して「ここにあるよ」と、穴に入ってみる①。(5)(7)(12) 2人それぞれの穴を掘っている。
◆M太が「おとしあなつくろう」と言うと◆C太が「みつからないようにこうしよう」と何か提案している②。(7)(8)
◆N太と◆M太はそれぞれ穴を掘り、◆C太は周りに線を描きながら、3人で相談している。◆C太が「じゃあ、そっちがおとこのこようのおとしあな、こっちがおんなのこようね」と言う。
●A男が水を汲みに行き、バケツから流すと水がたまる。その水を◆C太が流しては、すくうことを繰り返す③。(4)(8)(12)
●A男は穴に溜まった泥をかきだして、穴の周りにつけて固める③。(4)(8)(12)

事例4は同学年の遊びから、異学年の遊びへと移行し遊びの内容や友達との関わりを変化させながら遊んでいた様子である。そこで「内容」の(4)、(5)、(7)、(8)、(12)が関連している。①では、砂にスコップを挿して回しながら工夫して遊んでいる時に、砂の変化により偶然穴を発見し、さらに遊びが広がっている。それぞれが、遊びを発見したことで②の発展へとつながっている。同学年の関わりとして◆C太が1度は遊びに入ることを断られたが、関連するような遊びを提案することで遊びに参加できている。

③に見られる穴の周りを固める動作は、「穴掘り」の際に頻繁に観察できる。穴の中に水を流し、その底に溜まった泥をすくい出して周りを固めていることから、砂を泥

作りだけでなく穴の強化のためのコンクリートのような役割として使っている。道具を工夫して使いながら固める動作を繰り返すことで、遊びに集中し物事をやり遂げようとする気持ちを持ちながら遊んでいる。

砂場での「穴掘り」は「山作り」同様、長い時間をかけて砂の状態の変化に気付き、その砂の状態を活用することで楽しみながらやり遂げようとし、発展する遊びである。また、砂場遊びを通して子ども同士の関わりが変化したり広がったりすることで、子ども達が友達と関わる方法を身に付けている。

### 3-5. 水流し

#### 事例5 「水流し」

<7月15日(水)曇り>

事 例
◆C太が設置していた、漏斗型のおもちゃに水を流すことでまとまり、●E男が「ここにみずをいれるから、ガツとここをほらないでね」と言い、水を汲みに行く①。(4)(6)(10) 周りもみんな「うん、わかった」と同意する。
●E男はアイスクリームのコーン型のおもちゃに水を入れ、漏斗型のおもちゃに流して「いいね、でた」と水の流れる様子を確認していた②。(4)(12)
●E男は、川を掘り進め、その途中の部分に、漏斗型のおもちゃに砂をかぶせて動かないように設置し、◆C太に「ここにみずをながすってのは、どう？」と確認すると、◆C太が同意する。川のその他の部分にも小さな仕掛けを作ることを●E男が提案し、◆C太が実行していた③。(7)(12)
◆B太がじょうろの水を、漏斗型のおもちゃからダムに流すと●D男が大歓声をあげる④。(4)(10)
年長組、片付けの時間になり終わるが、他の場所でも●A男と●F男と◆B太と◆A太と◆C太が漏斗型のおもちゃを設置して、水を流す遊びをしていた⑤。(4)(12)
●A男は漏斗型のおもちゃを、2段にして段階的に流していた⑥。(12)

上記の事例5では異学年での遊びの中で提案をしたりその提案を汲み取ったりしていることや、砂場の道具を工夫しながら遊びを発展させていることから、「内容」の(4)、(6)、(7)、(10)、(12)が関連していることが分かる。①では川の途中に漏斗型のおもちゃを設置し、そこから水を流している。漏斗型のおもちゃの周りを掘ると川が崩れてしまい、●E男の考えている水の流れにならないと考えて声をかけている。3-2.の事例2でも記述したように●E男には自分の考えを通そうとすることがある

が、遊び方によっては他の子の意見も受け入れることができる。そのため、周りの友達からも頼られているようである。②では、たくさん水ではなく、アイスクリームのコーン型のおもちゃに水を入れて流してみることで、少ない水の流れがどのようになるのかを確かめている。また、水の流れを予想して漏斗型のおもちゃを設置したのは、以前に経験していたためと考える。③では他学年の関わりの中で、お互いの遊びたい遊びや気持ちを理解し認め合って、それぞれができることを行い進めている。④では直接ダムに水を流すとすぐに砂に吸収され崩れてしまうことや、漏斗型のおもちゃを設置することで水がスムーズに流れることを理解し、遊びながら異年齢同士でも遊びを共有し合っている。⑤では自分の近くで興味のある遊びをしていたことを模倣し、自分なりの方法で遊んでいる様子が見られ、その遊びが異学年の友達に伝わっている。⑥では漏斗型のおもちゃを2段に設置するという工夫によって遊び方を発展させ、水の流れの変化を観察して楽しんでいる。

砂場遊びでは水を流すという遊びを通して友達と関わり道具なども工夫し、自分で納得する行為をいろいろ試しながらやり遂げようとする気持ちをもてるようになっている。

### 3-6. 砂を雨にして遊ぶ

#### 事例6 「砂を雨にして遊ぶ」

<7月2日(木) 晴れ>

事例
◆A太は鍋擦り切れ1杯の砂を入れ、「おもしろい」と言いながら、撮影者に見せるように持ってくる。その後、◆C太が砂をすくって、上から下に落としながら「あめだー」と言っている姿を見て、◆A太も同じように「あめだー」と言って、砂を落としている①。(5)
◆A太が砂を落とすことを止めて、鍋の所にきて、スコップで叩いて固める。◆C太も◆A太がやめると「はい、やんだ」と言い、手で砂をすくって、固めようとする②。(5)

事例6は仲の良い友達同士で遊び、いつもとは違った様子を見せていた子ども達の遊びの展開で「内容」(5)が関連している。①では乾燥した砂を1人の子どもが見つけると、もう1人も同様に砂を落として遊ぶことが始まり、その行為が面白くなり伝達し合って遊びが広がっている。1人が遊びを止めるともう1人も遊びを止めている。この2人は仲の良い友達同士で、砂場でも一緒に遊ぶことが多い。日頃から遊びの中で◆C太が主導権を握ることが多いが、②では砂を落とす遊びよりもスコップで固める遊びの方が楽しいと考えた友達を見て、自分も

遊びを止めてしまったようである。◆A太の方が鍋の砂を固める遊びをしたいという気持ちが強かったため、結果的に◆A太の遊びに合わせることになった。◆A太と◆C太が共感し合いながら遊んでいる。

日頃から一緒に遊ぶことで友達の興味関心を知ることができ、その遊びに同調する子ども達も多い。友達同士で積極的に関わることで信頼関係を築き、遊びを提案し合い、またその遊びを一緒に楽しみ、喜びを共感し合い、さらに関係が深まるようになる。

### 3-7. 池作り

#### 事例7 「池作り」

<7月9日(木) 曇り>

事例
◆A太が作った池に、★B介と★D介が砂をいれてしまい、◆A太が「やめて、だめだよ」と注意する。★B介はやめて、別の水入れの容器を持って、ボウルの所に戻り、容器の中に砂を入れる①。(9)(11)

事例7は異学年で発生した子ども同士のやり取りで思いやりの気持ちをもって接している場面であり「内容」(9)と(11)が関連している。①では◆A太が友達と◆C太と一緒に穴を掘り、水を運んで作った池に興味を持った年少組の子ども達がいた。その子ども達は池の中に砂を入れて水の様子を観察していた所、穴に水が溜まることうらやましかったようで、砂を入れてみた。そのことを◆A太から注意され、すぐにやめて別の遊びをし始めた。年少組の子ども達は特に悪気はなかったようであるが、穴の中に砂を入れたいという興味の方が強かったのだろう。◆A太も年下の友達に対して強い言い方ではなく、言い聞かせるように注意していた。この様子から、年上という自覚を持って声を掛けていたと理解できる。

砂場遊びでは異年齢の関わりが多く、その中で同学年の関わりや異学年の関わりなどを身に付け、影響し合いながら遊んでいる。環境的にも砂場が全学年共有で使われているということも関係していると考えられる。

### 3-8. スコップ使い

#### 事例8 「スコップ使い」

<7月21日(火) 曇り時々晴れ時々雨>

事例
◆Qがやって来て、スコップを「かして」と言うと◆C太は「みんなでつかうやつだから」と言う。◆Q太は「これは？」と聞くが、◆C太は使うよう取り上げるが、「ぜんぶはつかわない」と言っている。黄色のスコップを◆Q太に渡す①。(9)(11)



事例 8 は道具の使い方と友達とのやり取りを考えながら行動していた子ども達の様子で、「内容」の(9)と(11)が関連している。①は先に砂場に来た◆C太と後からやってきた◆Q太のやり取りである。砂場で使う道具は先に砂場に来て選ぶ方が、自分の使いたい物が使えることを分かっている。初めに◆C太がほとんどのスコップを持ち出して砂場の上に並べていた。そこに、後から来た◆Q太から「かして」と言われ、自分自身にも言い聞かせるように「みんなでつかうもの」と◆Q太に伝えていた。◆C太はおもちゃの貸し借りはしないといけないと分かっているが、自分で出した物を持っていかれることはあまり納得しない様子だった。結果的に1本だけ貸して◆C太なりに相手の友達に納得してもらおう形を選んだようである。そのことは1本だけ貸すという行動に表れている。◆C太は友達とのやり取りで自分のしたことを振り返り、スコップを独り占めすることは良くないことだと気づき、自分の気持ちも少し我慢して友達に対しても我慢してもらおうような行動を取り、お互いが納得できる方法を生み出している。

同年齢の友達あるいは異年齢の友達とのやり取りや道具の貸し借りなどを通して、友達との関わりを考えて、行動できるようになる。

### 3-9. 川作り

#### 事例 9 「川作り」

<7月16日(木)曇りのち雨>

事 例
◆N太がじょうろに水を入れてきて、●E男に「どこからながす?」と聞き、穴からつなげて作った川の始まりに、漏斗型のおもちゃを設置している所から水を流す①。(5)(7)(8)
●E男は穴の近くを掘りながら、「ここに、とんねるつくるのどう?」と聞くと、●A男が「いいねえ」と答える。そして、○M子と話しながら、トンネルを作っている②。(5)(6)(10)
○M子がじょうろに水を入れてきて、反対側の漏斗型のおもちゃから水を入れると、沢山流れたので、◆N太が「おーいった」と声をあげる③。(5)(8) ○M子は水が流れた先の所を、足で踏み固めている。そして、「もういっかい、いってこよう」と言い、じょうろを持っていく。◆M太が、水の流れた所を見て、「これ、コンクリートになった」と周りの友達に知らせる④。(6)(10)
●F男が「このこうじいれて」と言う。
◆M太が、コンクリートになったと言っていることに反応して、◆L太がその固まった所を手で確かめている⑤。(7)(8)(10)

この事例 9 は異年齢の友達が作った穴を見つけて川作りが始まり、お互いに提案したり相談したりしながら、遊びが展開し楽しんでいる様子から「内容」の(5)、(6)、(7)、(8)、(10)が関連していることが分かる。遊びの始まりは◆N太と◆M太がスコップをぐるぐると回しながら掘った穴が落とし穴になり、その穴を●E男と○M子が見つけたことである。

①では前日に「川作り」をしていた●E男が同じように「川作り」をして遊びたいという気持ちになり、同学年の○M子と共に川を作って水を流すことを繰り返し楽しんでた。②は遊びが発展することでトンネルを作ることを思いつき、友達に提案し一緒に遊んでいる友達もその提案を受け入れることで共感していることが分かる。③では友達の行動を認め共感し、遊びが進んでいる。さらに川を作る過程で、砂の状態の変化を利用して④で泥が少し乾いて固まった状態を実際にコンクリートを見た経験から「コンクリート」と表現したり、⑤でM太が言ったことを耳にして泥の状態を確かめ興味が湧き、砂が固まった状態を確認したりしている。

砂場でダイナミックに川を作る中、砂の変化する状態を発見し、遊びに取り入れることで砂場遊びの楽しさを味わい、心身共に充実した時間を過ごすことができている。また、どの事例においても砂場での「山作り」などの遊びには比較的、長い時間をかけていることが多い。その過程で友達同士遊びが伝達し、役割分担へとつながっていると同時に、一緒に遊んでいる友達の気持ちを汲み取りながら友達とのかかわりを深めている。

### 4. 総合的考察

砂場遊びの事例を通して幼稚園教育要領の領域「人間関係」のねらいに即した、具体的な「内容」を見いだすことができることを示した。

事例 1 の「山作り」では、集団での遊びの中で自然と友達や保育者との関わりが生まれ、同じ遊びをすることの喜びを感じていることが明らかになった。また、子ども同士で山を高くするにはどのようにすれば良いか、お互いに声を掛け合いながら遊び、関わりを深めている。

事例 2 の「ダム作り」では異学年の友達と関わり、お互いに遊びを提案し合ったり、年上の子が年下の子に指示したりすることから遊びが伝わり発展し、協力する喜びを感じている。

事例 3 の「穴掘り」や「川作り」ではそれぞれ別々に遊んでいた子ども達がお互いの遊びを認め、「川作り」をより楽しくしたいという気持ちを伝え合っていた。その中でもそれぞれが自分でできる穴掘りや水運び、川の溝作

りに没頭していた行動が見られ、遊びが発展している。

事例4の「落とし穴」や「穴掘り」では子どもの偶然的行動が楽しい遊びになり、砂の変化を発見した遊びである。砂の変化により遊びが発展することは砂場で頻繁に起こることであり、その変化に気付くことで遊びの発展に違いが見られる。

事例5の「水流し」では水を流すためにはどのような道具を使い、どのように川を掘り進めば良いか試しながらスムーズに水が流れることを目標にして遊んでいる。

事例6の「砂を雨にして遊ぶ」では友達との密接な関わりの中で、楽しい遊びを発見していた。遊びを通して関係が深まり、さらに楽しい遊びへと発展することでお互いの気持ちを理解し合うことができるようになってきている。

事例7の「池作り」では異年齢の関わりの中で良いことや悪いことについての遊びが伝達し、子ども達が相互に影響し合う中で砂場遊びのルールなどを知ることができている。

事例8の「スコップ使い」では自分の気持ちと友達の気持ちに気付き、どのようにすればお互いが気持ちよく遊ぶことができるようになるのかを考えながらやり取りをしていた。

事例9の「川作り」では砂場で長い時間を過ごしながら遊ぶことで遊びの発展があり、一緒に遊んでいる友達のこと考えながら遊べるようになってきている。さらに、お互いの遊びが影響し合う姿も見られる。

これらのことから幼稚園の1か所の砂場において、異年齢同士の関わりや言葉のやり取りがあり、お互いに影響を受け、遊びを発展させることができている。これは大きな利点があり特に「人間関係」の「内容」が関連していることが顕著に表れている。

問題と目的において、幼稚園教育要領改訂に先立つものとして、学習指導要領での「学びの地図」での役割が果たせるよう6点を砂場遊びに換言して述べたが、本稿を通して以下のことが示された。「①砂場遊びで何ができるようになるか」では、事例5などで道具の使い方を遊びながら、工夫する姿を観察できた。「②砂場遊びの中で何を学ぶか」では、事例7で砂場遊びのルールを学んでいた。「③砂場遊びでどのように学ぶか」では、事例3などで友達同士の協力や言葉の伝達で砂場遊びの楽しさを経験していた。「④砂場遊びで子供一人一人の発達をどのように支援するか」では、事例1のように保育者が遊びの支援などを行うことで、砂場遊びが発展したり深まったりすることになっていた。「⑤砂場遊びで何が身に付いたか」では、事例6などで砂の状態を理解し友達と共有することで、関わりが深まっていた。「⑥砂場遊びを実施するために何が必要か」では、事例9のように友達同士で遊びの楽しさを伝え合い、認め合うことで砂場遊びの発展が見られ、友達同士思いやる気持ちなども生まれてい

たことが分かる。

幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」において、領域「人間関係」に関連することが4つある。すなわち(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わりである。砂場遊びの事例を通して、幼稚園教育要領の領域「人間関係」の「内容」はこれらの4つの子どもの「姿」の中に見いだすことができ、保育者として、また研究者として砂場遊びの重要性を再認識することができる。さらに特に保育者の立場からは、このような砂場での子どもの姿をカリキュラムや日々の計画に反映し、意識することで子どもの成長や子どもの理解に役立ち、さらには子どもと共に遊ぶことの楽しさを再認識する機会となると考える。

#### 引用・参考文献

- 笠間浩幸「砂遊びに見る子どもの育ち(特集幼児になぜ運動が必要か)『子どもと発育発達』第11巻第4号、2014年、222-225頁。
- 仙田満「子どもとあそび—環境建築家の眼」岩波書店、1992年。
- 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省、2016年。
- 朴恩美、中坪史典「幼児の砂遊びに関する日本と今後の展望」『広島大学大学院教育学研究科紀要第3部教育人間科学関連領域』第57号、2008年、285-290頁。
- 箕輪潤子「幼児同士の砂遊びの特徴—カーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—」『保育学研究』第44巻第2号、2006年、178-188頁。
- 箕輪潤子「砂場におけるままごと遊びの発達の検討」『川村学園女子大学研究紀要』第21巻第2号、2010年、53-67頁。
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年